〈作品紹介〉

白綸子地梅樹に鳥兜文様小袖　一領

（染入　摺匹田　刺繍）

大手前女子大学蔵（口絵）

切畑　健

大手前女子大学蔵のこの小袖は、従来、染織史研究者にも全く知られていなかったもので、したがって近世の小袖類を収録した各種の図録類にも見ることはできなかった。ここにそのあらましを紹介することとしたい。

生地―白綸子、卍字繋ぎに蘭菊散らしの地文様。

仕立―小袖仕立。裏―紅絹、ただし寄裂。

法量―寸法表参照

文様―背面（口絵）―右裾から立ち上った満開の梅樹が背中央で左右の袖におよんで枝をひろげる。梅花は八重と一重を取りまぜ、さらに大小に配慮し、枝先に蕾をそえている。右腰と左裾にはそれぞれ脇縫からのぞかせるように、さしかけた日除障子の趣で、長方形に七宝つなぎをまとめた形象をあらわし、あたかもそれを支えるように細柱で受ける。背中央・右袖がかりと左袖に舞楽の鳥兜を梅樹の上文様として配している。左脇腰部分にわずかな空間を取り、この部分に文様をあらわすのを控える。

―前面（挿図1）―背面と同様の梅樹・障子・鳥兜で構成されるが、当期の小袖文様の常として、背面のように構成は整わず前面は雑然とした様相をしめす。またこれも通例ながら、脇の部分で背面と絵羽文様とはならない。しかし背面からとにかく繋がる位置に障子を配していて、全く背面と前面が無関係の各独立した構図ではないと思わせる。

施工―梅樹の幹や枝は紅摺匹田。花を摺匹田（一重）と刺繍（八重）であらわす。摺匹田は紅と黒かと見えるほどの濃藍の二種で摺り詰

白綸子地梅樹に鳥兜文様小袖　一領

める。刺繍処理も二種で比較的幅広い繍切り中陰の表現で、1は紅で花弁を、萌葱平繍で花粉、蘂の芯を金駒繍と紅一本引の線繍であらわす。2は金駒繍で花弁を綴じあげ、花弁の芯や花粉は紅の平繍、蘂芯は金駒、萌葱一本引の線繍。小梅花はいずれも金駒繍。蕾はおおむね紅平繍で、金駒繍を加える。なお細枝の先端は萌葱繍切り。

日除障子と思える形象は、七宝の輪違い部分を墨（『正徳ひな形』―西川祐信、正徳三年〈一七一三〉刊―に「紺の染入」などとあるものにあたるか。したがってここでは墨の染入と言えるかもしれない）とし、総縁と七宝つなぎ内の花菱を紅摺匹田、受け柱をまさに紺の染入とする。なお花菱のいくつかを金駒詰、総縁をのぞいた七宝の輪違い部分の縁とその辻に金駒繍を加えている。

鳥兜は、頂から下方へ記せば、その頂部分は濃藍摺匹田、立上りの1は墨染入に萌葱唐草まつい繍。立上り2は紅摺匹田。中央帯は金駒繍。綴の1は紅摺匹田。2は墨染入に紅菊花と萌葱唐草の刺繍。3は濃紺摺匹田。4は墨染入に紅菊花と萌葱唐草繍。立上り・綴ともに、墨染入の部分はその縁に、金駒繍による幅広の縁繍いを加えている。

なお色糸による刺繍はすべて平糸が用いられている。金糸はかなり太く、いわゆる五掛けばかりはあると見られ、金色は上質。また摺匹田は、紅の場合は弁柄色の細線でその縁を括り、紅色で各粒中心の点を打つ。濃藍の場合はおそらく墨の仕上げ線で処理されていると見られる。ただし顕著ではない。墨点を匹田の芯に点じる。

時代―江戸時代中期

保存状態―当期の例としては比較的良好。ただし、襟山部分にかなり着用されたことを思わせる特有の線状の汚損が、襟幅中央の折れにそって走っている。これも通例ながら金駒繍糸の、特に線表現の部分で綴糸の脱落が見られる。また裏紅絹は全体の通し裏ではなく、異った数種の裂地を用いている。なお裾袵で切れ、裾綿（木綿綿を絹綿でくるんでいる）ののぞいている部分がある。表地の表面では褪色がすすんでいるが、ほころびからうかがえる裏面は、紅・萌葱が鮮やかで当初の色を推考させる。なお袖口の袵に紺平絹地唐花文様型染裂をつける。この裂地はそれほど古くは見えない。

この一領では特に仕立て替えされているのに注目される。仕立替えはかつてのはぎ合せ痕が、よごれとして残存していることにうかがわれ、ある時期の寸法によればかなり小柄な女性が着用した時期のあることが知られる。仕立て替え、繰り廻しが最も顕著

であるのは両袖の左右が入れかわっていることで、したがって梅や鳥兜文様が羽絵にならない。また現状の袂の丸も当初の形ではなく、その痕跡によれば当然ながらさらに大きな丸であったことが知られる。挿図2は現状の袖の左右を入れかえた復原図。

備考―この文様の梅・鳥兜・障子の組合せの意味に興味が持たれる。その確かな意味を推考する前に、共通する文様の存在をうかがいたい。ひいながた本によれば、正徳三年（一七一三）刊の『正徳ひなかた』（今尾和雄編　はくおう社複刻）に、「野郎風」として「梅に鳥かぶとのもやう」（八十五番・挿図3）が見られる。ここでもその組合せの意味は明らかではない。正徳四年刊行の『雛形祇園林』（上野佐江子編『小袖模様雛形本集成』学習研究社）にはその四十三（挿図4）に「難波の梅」と題して、満開の梅樹に能の悪尉面、鳥兜、中啓、天冠、作り物、鬘桶などで構成された文様を見出す。これはそのもととなった能楽の「難波」（古名「難波梅」）によったことは明らかで、シテの梅の精（実は百済の王仁）が詠みかける「難波津に咲くやこの花」（『古今和歌集』序）、すなわち梅花と、後シテの王仁の唐装に用いられる鳥兜とを組み合わせたことが知られる。

このようにこの一領の文様主題はほぼ明らかにされたと考えるのであるが、作期を江戸時代中期とする理由を明らかにしなければならない。まず生地の綸子の光沢の豊かさに注目される。それは現今のような浅薄な光沢ではなく、重みや深さや丸味やなめらかさなど、特有の風格を感じさせるのは江戸時代初・前・中期の小袖裂に共通する。

次に文様の構図である。裾から立ちのぼる梅樹の大構図、背の側では特に帯結びの位置に、中心的な主題である鳥兜を配しているのは、当期ならではの幅狭い帯や結び方の特色をうかがわせる。

施工は摺匹田と刺繍を主とし、染入を併用するが、特に刺繍は太い色糸の平繍を主とした重厚な趣にやはり太い金糸が調和し、紅の多用もこの時代の明るい旺盛さをよくしめしている。また摺匹田の頻用も中期になって俄然あきらきになるところである。それもまた、こよなき平明な華やかさを好み、なるだけ早く、あるいは安価で完成するとしてもよいかもしれないが、独特の摺匹田の魅力を重用した時代の特色をうかがわせる。しかし、この一領の摺匹田をつぶさにうかがうと、例えばおそらく元禄期を中心と

する頃かと思える小袖の摺匹田と異る点に気づく。すなわち元禄期のものより、一段と鹿の子の粒が小さくなっていることで、それは例えば享保期かと考えられる武家小袖に見る摺匹田の、細かく整った、したがって一種の冷たさや繊細さから感じられるひ弱さを特色とする場合を想起させる。このような諸点から、この小袖の作期は、享保までは降らないにしても、元禄をへだたった時期であることを推測させる。

ちなみに『正徳ひな形』の前掲文様には「地あさぎゆふせんぞめ」いろ〳〵小色入」みすはちや」すゝたけ」へりもへぎ」と注記があって、友禅染が好まれた最盛期はすでに過ぎているが、役者（野郎）の衣服に柔らかな染技が華やかさをしめしていた。しかしこの小袖をほぼ同じ頃と考えると、きわめて対照的に、刺繍と摺匹田による古風さをとどめたものといえるのである。

また、先に文様の条で述べたが、背面と前面が絵羽文様になることにほとんど無関心ともいえる、江戸時代初・前・中期の小袖の特色をしめしつつ、わずかながら江戸時代後期に完成する絵羽構成への興味の存在や、表現への配慮が看てとれるのも、作期を教えるといえよう。

仕立替えされたことがそのよごれの痕によって明らかにうかがえるほど、それぞれの時期によく着用されたことが知られて、また別の感動が得られるのである。

寸法表

丈	一四七・〇、	裄	五九・八
後身幅	①二八・六	②二九・六	
前身幅	①二二・〇	②二五・〇	
袖幅	①二九・〇	②三〇・二	

単位　センチメートル

①②は仕立替えによる寸法の変化

白綸子地梅樹に鳥兜文様小袖　一領

挿図２　袖部分復原

挿図１　前　　面

挿図４　『雛形祇園林』
正徳四年（1714）刊

挿図３　『正徳ひな形』
正徳三年（1713）刊